郷土研究会資料 昭和五十三年九月二十四日

第八十九回 史跡めぐり

さきたま資料館と前玉神社

越谷市郷土研究会

埼玉古墳と前玉神社

埼玉古墳研究会　日置宋一

武蔵国のなかでも大きな古墳の最も多く集っているところは埼玉県行田市埼玉の古墳であろう。埼玉という部落は、今でこそ行田市に編入されているが以前は埼玉郡に属する大きな古村で群家の所在地であった。正倉院文書戸籍帳、山城国愛宕郡雲下里計帳、神亀三年（七二六）に前玉郡と記し万葉集には、佐吉多万・延喜式神名帳にもサキタマと訓じている。

※　※　※

今行田市の町はづれから東南北本駅に通ずる道を二キロも行くと道の両側稲田のなかに古墳が点々と横わっているのが視界に入ってくる。それらの古墳のうち、主なるものは、左手三百メートルほどに丸墓山と称せられる円墳がある。円墳としては日本でも他に類例を見ない大きな古墳である。（現在では前方後円墳と証明される。）高さ十六メートル、径一〇〇メートル、周囲三百メートルある。頂上は灌木が茂り見晴しが良い。その東方三百米のところには将軍山と称する前方後円墳がある。この古墳は明治二七年発掘され石廓を発見されたが石廓は穿孔長殺の両端に房州石を以って築かれ天井は巨大なる秩父石にて蓋をしてあったという。又出土した遺物もおびたゞしい数にのぼったといわれる。

丸墓山の東南に稲荷山古墳があり先年発掘され山頂の隧道墓形が復現されている。（将軍山古墳出土品と共に出土品は資料館に展示）右手に大きな前方後円墳が沼をめぐらして横たわっている。二子山といわれており全山低い樹林に被われ完全な原形

をとどめている。さらに県道を渡ると相対する位置に鉄砲山と称せられる前方後円墳がある。鉄砲山と称せられるわけは、江戸時代に忍藩がこの辺で砲術演習場としていたことがあるからである。鉄砲山の東方百メートル程のところに武州社の前玉神社が鎮座しているが、この前玉神社も社殿が古墳の上に位置しているのである。この古墳は後世いちじるしく変形され原形をとどめていない。

神社宮司の談によればこの古墳はもと前方後円墳であったらしいとのことである。新編武蔵風土記稿は当時に関して次のように記している

「社地の様、平地の田甫中より突出せる塚にて周り二町程、高さ三丈余、四方に喬木生い茂り頂上僅か十坪ほどの平地にして、そこに小社を建つ」と。

以上のほか埼玉部落に現存する古墳としては瓦塚・中の山（今早稲田遺跡）奥二山・愛宕山ポッチ山と称せられるものがある。さらに現在はすでに開墾されて痕跡をとどめていないが古墳としての記録の存するものが二十三あり、その中の記録に残されず、取り崩された古墳も数多くあった事であろう。

前玉神社の東南方六〇〇米ほどのところに「百塚」という地名があり、また遺跡の開土されて記録もあるがいまは跡らしきものは認められない。

このような武蔵国ないし関東でも珍らしい大規模な古墳群の存在は、なにを物語るものであろか。思うに往昔、隆盛を極めた国造の何代かにわたる一族を中心とした墳墓であるとしか考えられないのである。

日本古墳文化の発達した地域は九州、畿内関東であってなかでも武蔵野の存在はその大きさと数において主たるものである。　これは

古墳時代は荒川や古利根川の沿岸には舟による水運がひらけ、稲作に適した高い古代文化が開けていたためである。

武蔵野の正史時代への発展はこの古墳文化と云われる豪族文化の発展に伴ない地域的に村落が開発されていったところにはじまる。

武蔵野にも農業技術をもった古代農耕文化と云われるものが六世紀以後開花したこの文化は、部落単位の豪族の文化とも考えられ、西から伝えられた高度の生活技術を持っていた。それは次第に富と権力をもつ豪族を育て死後を祀る墓土の古墳を残すようなこの社会を成長させていった。この時代の畿内地方にこの豪族の統一者の中から大和朝廷が興来、その勢力が伸びて来た。朝廷は勢力拡大を図るのに地地の豪族を勢力と富の強弱を尺度に国造又は県主に任命した。（皮務期）武蔵野には当時 邪馬志国造 兄多毛比命と 胸刺国造 伊狭知直とがあった。兄邪志命は荒川を中心に東京の北東部から奥武蔵にかけて発展していた豪族でありこの指導者と見られる一族であり、出雲臣の系統をひく有力な族長で大己貴命を祭神とする大宮氷川神社はこの氏族の氏神であると考えられる。

前玉神社は、埼玉郡の該地の中心に近かく鎮座し、延喜式内神名帳の武蔵国埼玉郡四座の中の「前玉二社」とあるのに該当するのが通説の様である。前玉神社を祀ったものが武蔵国造の一族であったと云う事は、先づ間違いないことと云わなければなるまい。とすればこの前玉神社の一座は氷川神のサキタマを祀ったと云う後説も充分可能であると思われる。前玉神社の祭神二座のうち一座が氷川神社の幸魂を祀ったものであるとして先づ問題としたいのは前玉神社と古墳との関係についてである。

「田島宮司」によれば

もともと神社の社殿も古墳の下にあったのであるが、近世富士信仰の盛んとなった時に古墳と知らずに小高い山の上に社殿を移して、富士浅間社を祠ったものであろうと云う

現社は古墳の中腹に小社があり、祭神として「木花開耶姫」を祀り、浅間社の額が掛けてある。

富士信仰の盛んになったのは、近世以降のことであるから、過去においてこの社殿は平地に在り、おそらく古墳を拝祠するような位置に在ったのではないかと想像される。

即ち前玉神社の一座は、元来この古墳に葬られた人を崇めてこれを祭ったものと解したいと思われるのである。

引用文献資料

埼玉県地名誌　韮塚一三郎　北辰図書

武蔵国式内社の歴史地理　菱沼勇　永昌堂社

武蔵野　桜井正信　社会思想社

埼玉人物小事典　小野文雄　埼玉県人物小事典刊行会

埼玉の歴史　小野文雄　有隣書院